

図書館情報学橋会会報 第26号(通号32号)

2019年11月発行 発行者 図書館情報学橋会

○図書館短期大学と私の転点○

大場高志（図書館短期大学別科 1976年卒業）

昭和50年4月、世田谷区下馬の図書館短期大学では、入学式を終えた特別養成課程生36名がグラウンドの桜の木の下で集合写真を撮り教室に三々五々もどる間、暖かな桜吹雪が女学生等の碧の黒髪とプリーツスカートの裾をはためかせていた。

昭和44年4月、私は東京都立大学に入学した。時は学園紛争期、6月28日にバリケード封鎖があり、10月29日機動隊が導入されて封鎖は解除された。解除日前に私はバリケードから逃げた。その後、いくつかセクトを渡り、街頭闘争にも参加したが、闘争の正当性を実感できず学内に戻って、大学生活6年目には映画研究会の片隅でくさっていた。

つまり私は大学教育のイロハを知らず、学問研究の基礎（特に方法論）を学ぶことなく6年間の大学生活を送った。昭和49年には第一次オイルショックもあり就職は全滅だった。都立大学入学同期の故大江隆男氏が前年に図書館短期大学別科に進学していた。この大学は東急東横線都立大学駅の隣の学芸大学駅にあり、直線距離でも2km弱の近くにあった。

図書館短期大学入学初日の入学式が冒頭の情景である。その日からの1年間は私の3回あるゴールデンエイジの2回目であった。この1年間で初めて私は大学教育というもの（特にゼミ教育）を経験し、勉強しなければ単位は取れないということを知った。昼休みはソフトボールに興じ、毎週木曜夕方は食堂で宴会だった。夢のような短大時代が過ぎ、翌年一橋大学附属経済研究所資料室に就職した。

就職最初の数か月はタイプライター教本を渡され、ひたすらタイプライターが打てるよう練習をしていた。これで給料がもらえるとはと驚いたものだ。

世間知らずで生意気な私を数年後に再教育してくれたのが故清水末寿氏（図書館職員養成所卒）だっ

た。図書目録に限らず、原議書や支出負担行為書の書き方など大学内での振舞いや公務員生活のイロハを教えてもらった。思い込みの激しい人であったが、私が唯一「師匠」と呼ぶ人であった¹。

昭和62年5月一橋大学附属図書館に異動になり、森茜氏（図書館短大別科卒）と出会うことになる。精力的に様々な仕事をさせられた。感謝している。

平成7年学術情報センターに異動した時には、茂出木理子氏、相原雪乃氏、小陳左和子氏、佐藤初美氏など図書館情報大学卒の方々に学術情報流通の基盤構築のための作法を教えていただいた。また、平成12年からの千葉大学附属図書館時代には、鈴木宏子氏や米田奈穂氏など図書館情報大学卒の方々に総合大学附属図書館の運営作法を教えていただいた。もちろん一橋大学附属図書館にも多くの卒業生がいて、多大な恩恵を受けてきた。

まともに大学教育を受けていない私は、課題に対する解もその方法論も知らない。しかし1年間の図書館情報学のおかげで、課題解決に向けての解を知る人を探し出す方法だけは学んだのかもしれない。

一橋大学退職後は一橋大学学園史資料室で働くこととなり、故川崎操氏（文部省図書館員教習所卒）²や図書館員教習所の創設以来の教員であった故太田為三郎氏などの業績を知ることができた³。

¹ 清水末寿『文献の海を越えて：大学図書館の39年』（日本図書館協会（販売）、2004.6）

² 大場高志「川崎操：一橋大学附属図書館伝説の事務長」（『一橋大学附属図書館研究開発室年報』創刊号、2013.3）
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/25658>

³ 大場高志「「くにたち本の会」のひとびと（その1）」－「同（その2）」（『一橋大学創立150年史準備室ニューズレター』4-5号、2018.3-2019.3）
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/18539>
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/18614>

昭和 30 年代の文部省図書館職員養成所

—図書館学履修と図書資料整理全般の実習による専門職員の育成—

森田 稲二（養成所卒業 1957 年）

平成最後の正月早々、橘会事務局より、下記写真送付へのお礼状と共に、橘会会報への執筆依頼がありました。最近 TV でも思い出を扱う番組が企画されている折りでもあり、昭和 30 年代の養成所の教科内容と実習の一端を恩師を偲びながら紹介したいと思います。

八期生 18 名が集う「卒業六十一年同期会」を平成三十年五月、上野精養軒で開催した際に配布した資料の表紙「文部省図書館職員養成所」刻印の旧校舍門柱入口写真を筑波大・橘会へ送付したことが、本稿の始まりです。

写真中央の増築新校舍に旧校門を重ね合わせれば、ありし日の養成所を思い起こせるでしょう。



上野の増築となった養成所時代の校舍

日本図書館協会所在地
東京藝術大学音楽部校舎との間
増築新校舎（橘会会報から転載）



文部省図書館職員養成所門柱
旧校舎正門（建屋はモルタル式）
跡地は現在、更地・巨木林

A コース（高卒）八期生は昭和三十年四月入学、昭和三十二年三月卒業で二年間養成所に通学。遡ること六十二、三年前になりストレート入学組でも八十二歳になり大分記憶も薄れ、思い出すのも尋常ではありません。同級生数名の協力を得て記憶を辿りながら記述したものです。

入学試験会場は養成所教室だけでは足りずに上野中学校の教室も試験会場にして行われました。養成所は入学金、授業料免除にして就職率 100%ということで人気があり、受験者数はおよそ千人「国語、社会、英語」3 科目試験で合格倍率は相当高く難関な入学試験でした。

A コース（二年制）入学 66 名（男子 30、女子 36）、在校二年生 60 名前後、B コース 20 名（大卒一年制）、約 140 数名が北は北海道から南は九州各地域から集う学び舎でありました。

A コース履修科目は漏れもありますが多岐に亘り錚錚たる諸講師による講義でした。図書館学、図書館通論、図書館史、図書選択、分類・目録（和洋）、古文書、漢籍、視聴覚資料、特殊資料、逐次刊行物（年刊・四半期、隔月刊、新聞・雑誌）、図書館運営（公共、学校図書館）、図書館相互貸借、教育学、社会教育、人文科学（出版文化、美術史、社会調査統計）、二次資料（蔵書目録、新着図書資料の広報）、図書館用品、実務学習（受付・登録・閲覧・貸出、製本・修復・曝書）、必須外国語（英語・独語・仏語）、哲学、体育など。履修単位数は不明ですが、広範囲な図書館学教科と実務の実習による必修単位数は 70 以上にもなったと思われます。

講義内容のあらまし

「養成所の使命」伊東正勝所長（図書館短期大学学長事務取扱）図書館界から囑望される高度の専門知識・技能を有する図書館職員の養成について、及び卒業論文の審査にも当たられました。

「図書館概論」武田虎之助先生（法政大学教授）図書館における社会教育の重要性を説き、閲覧読書室、社会科勉強室、児童室や研究調査室の充実が、館内施設として重要であることを力説。

「分類学」加藤宗厚先生（上野図書館長）日本十進分類法をデューイ十進分類法、ランガタンのコロソ分類法と比較しながらの説明と、分類請求記号の解説。「朝起きて目に入ったものに分類番号を付与してみる」このような分類訓練法を説かれるなど NDC 作成経緯を含めての講義。少年期は曹洞宗禅寺で過ごしており、僧侶の叔父から禅宗の教えを受け読経の事など面白い話もされました。

「目録法」に於ける「和書目録」彌吉光長先生（養成所同窓会会長）より森清「日本目録規則」を学ぶ。学術論文集を紀要と呼称するようになった経緯を説明され、大正 13 年刊行「東京帝国大学文科大学紀要」の標題が最初でこれ以降、全国の大学や研究所の学術論文集に紀要を冠するようになったのは、昭和 27 年からである、なども語られた。

「洋書目録」関野真吉先生（学習院大学図書館）著者目録及び書名目録カードの作成を学習。洋書著者目録での日本人著作者の姓名の記入方式は先生が提言され発表されたものが定着したものです。戦時中、京城帝国大学図書館に勤務して蔵書目録を作成したことなども話題にされた。

「和漢籍目録」長澤規矩也先生（法政大学教授、漢和辞典編者）羽織袴姿での講義は、“学生への礼儀である”として端正な和服姿で教壇に立ち、漢籍・古文書整理と和漢目録法を説明される中で、所蔵する沢山の和漢の古典籍から一部を持参し、常に風呂敷包から取り出し回覧しながら講義された。厳格な先生の講義は難解この上ないが、課外授業で静嘉堂文庫と大東急記念文庫見学があり、和綴本の漢籍、古文書類の稀覯本を見聞させてくれるなど、厳しくもあり深みのある授業でした。

「日本の図書文化史」中村春太郎先生（丸善「本の図書館」初代館長）図書による日本文化の歴史と丸善のブックセンターとしての役割を通して、洋書の発注・購入、整理法と図書館用品扱いの講義。入店間もない頃、先輩の間宮不二雄氏（図書館用品販売・間宮商店社長）から英語の薫陶を受けたことなども講話。図書館用品を扱う店はこの他に「伊藤伊」があります。

「公共図書館論」廿日出逸暁先生（千葉県立図書館長）図書館運営、収書選択による蔵書構成、読書・閲覧サービスなどの講義をされました。

「外国語」必修 3 科目 小出先生（英語）洋書教科書「Wonderful Libraries and Librarianship」で読みと解釈で図書館の素晴らしさと司書のあり方や図書館業務内容など、語学を通して学びました。

ドイツ語（先生の名前は失念）いわゆるドイツ文字の教科書で“der des dem den”の変化やシャ、シュ、シェスの撥ねる音が多いのに先生の発音の美しさが印象に残っています。

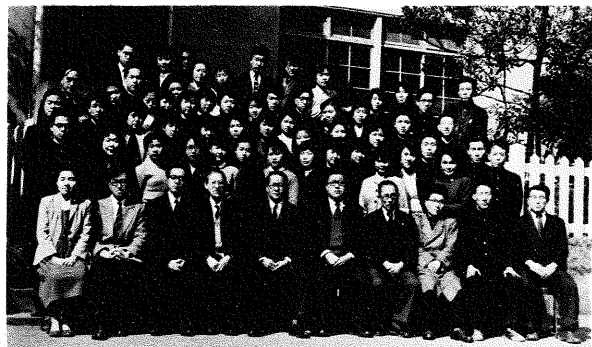
フランス語は内山先生（暁星高校）から途中で内藤先生（日仏学院）へ替わり、名詞には男性、女性、中性があり活用変化はどうなりますかと質問され閉口するなど厳しい教えでしたが、リエゾンによる抑揚は音楽のようで、プレイヤー持参で SP 盤でシャンソンを聴かせて呉れるなど、楽しい一面もありました。

「哲学」有山崧先生（日本図書館協会事務局長、日野市長）学問的アプローチの基礎をなす哲学の考え方から歴史書や古文書の扱い方、公共図書館の使命と運営、利用者サービスのあり方を講義。その中で「アルケー（Arkhe）＝万物の根源」の意を通して図書館理論の形成と実践を説かれましたが、この言葉は強く印象に残る。昭和 40 年日野市長に当選、協会を辞し市長として日野市立図書館の充実と市民奉仕に力を注ぎ移動図書館サービスを全国に先駆けて取り入れたのは、先生の基本哲理です。

「図書館学一般と分類・図書整理」服部金太郎先生（養成所教官、図書館短期大学教授）図書館業務である図書資料収集、整理、保管の講義の中で、図書を分類する上で分類表に該当項目が無く区分できない場合は、主題に相応しい項目を細目に展開させ独自「分類表」を作成し、図書を仕分け分類することの必要性を力説されました。その外、図書館員の教育問題にも触れられました。卒業後、「日本十進分類法」では専門図書館が扱う技術情報の主題をカバーしきれない原子力関係の分類について、加藤宗厚先生宅を訪問し直接ご指導して頂いたこともありました。大学、研究所の学術書、技術書を分類するのに不備な面がある「原子力工学、電気事業、情報工学、オペレーションズ・リサーチ」関係の資料を区分するのに必要な項目を追加するなどして独自「分類項目表」の作成に役立つことになりました。

「図書館奉仕（レファレンス・閲覧）、児童図書室」北島武彦先生（養成所教官、東京学芸大学教授）

読書指導、参考書利用やレファレンスの解説。児童図書室のあり方なども講義され、新しい学問分野となる情報管理に於いて後に記録・伝達などデータベースへ発展するドクメンテーションの啓蒙、普及にも腐心されました。学習外では、我々生徒と教師間の調整役も行うなど苦勞された面が多々あったようです。



前列左から 小出先生 中居先生 北島先生 関野先生
伊東所長 服部先生 加来事務長

人文科学では教育学、ジャーナリズム、美術史、社会調査統計の講義がありました。

「美術史」永井先生 スライド鑑賞による授業と美術館、博物館の見学に当てられ、美術展を見た感想をレポートに纏める宿題があり、展覧会を見ることが慣れになりました。仏像美術では仏像の見方を学び、上野博物館へ裏門守衛所入口から養成所の学生はフリーパスで入れてもらえたので、美術館と博物館の展示物の鑑賞によく出入りしました。

図書館建築の授業では、国立国会図書館やAコース、Bコース合同見学会で新築間もない神奈川県立図書館へ出かけ、Bコース藤野幸雄氏（図書館情報大学教授・副学長）も参加されていた。

図書館業務の実習について

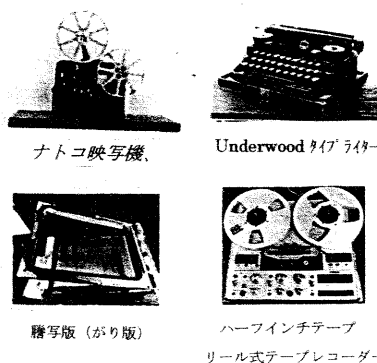
「視聴覚教育」文部省社会教育局の担当者からナトコ映写機（NATCO=National Company製）を使いCIE（Civil Information and Education Section）16mmフィルムの装着法、切れた場合のフィルム接着修復法など細かな扱い方を実機で学び映画上映出来る操作技術を実習しました。

神奈川県立図書館視聴覚部長より新しい分野となるフィルム、スライド、録音テープの分類を学ぶ。当時ハーフィンチテープ使用のリール式レコーダ持参で録音・再生実演もありました。目録カードの作成で洋書目録はUnderwood手動タイプライターでタイピングを実習体験。

和書目録作成は当時“湿式電子コピー機”は一般には未だ普及していませんし、富士Xeroxなど勿論なくカードの作成は手書き、もしくは謄写版（がり版）刷り、ローラインクで手を染めるなど現在ではとても考えられない事を実技で修得（がり版刷りのクラス会誌「槌の音」を在学中に6号迄作成）。現在のパソコン入力による目録作成とは比較になりませんが、隔世の感があります。

「古書修理」古野先生 古書の破れや背表紙の崩れを張り合わせ固める作業では、道具持参で、糊のとき方や和冊子の綴じ方などの指導も受けました。

このように養成所は多種多様な実習作業を取り入れて図書館業務のあらゆる面に精通する図書館員の養成に力を注いでいたと言えるでしょう。



ナトコ映写機

Underwood タイプライター

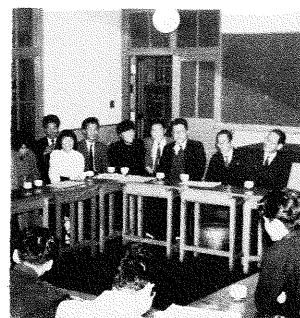
謄写版（がり版）

ハーフィンチテープ
リール式テープレコーダー

インターン実習と卒業論文審査

二年の夏期に実施されたインターン実習は、図書の分類、目録作成の専門知識習得のみにとどまらず実際の図書館活動（配架、貸出、返却・収納など）の実作業を体験するため、都内外の図書館（神奈川県立図書館、埼玉県立図書館、渋谷中央図書館、大東急記念文庫、東京大学、慶応大学医学部、順天堂大学、日本大学、電力中央研究所等）へ出向し、実習生として図書館業務に従事し、先輩からアドバイスを受けることも多く、実習先で学んだ「辞書体目録」の作成は講義では得られない学習になりました。

「卒業研究」卒業論文の提出が課せられ個人論文の他、二、三人に依る共同論文、グループ論文も認められていました。伊東所長、加藤先生、服部先生、北島先生、講師先生方が出席された卒業論文審査会で発表し、論文の審査・評価がなされ、パスして司書資格が与えられることとなりますが、論文審査は厳しいものがありました。



卒業論文審査

右の写真(右から)
伊東所長 加藤先生 服部先生 北島先生 講師の先生方も同席

養成所の使命と役割

戦後十年、近代日本の民主化に向けて求められる社会教育による知識の醸成と技術立国を目指す科学技術情報の収集処理を必要とする社会ニーズがあり、国公立図書館はもとより大学図書館や専門図書館(企業の調査部、研究部門)において各種科学技術情報処理能力を有する専門職員の求めに応える図書館職員の育成を目指す養成所の使命と役割は大きいものがあったと考えられます。

教科目は質量共に十分に豊富、充実した授業内容に比し、常勤専任教官、事務職員の絶対数不足と備品類や施設は必ずしも十分とはいえず、法制度上の問題も有ることから養成所が発展飛躍を期する短期大学昇格にはもう数年歳月を要することとなりますが、卒業生は即戦力の司書として都道府県立図書館や公共図書館に於いて各種情報提供による社会教育の一翼を担い、専門図書館では当該機関の調査研究活動の一端をサポートして来たと言えるでしょう。

養成所は昭和 33 年に来日したランガナタン (Ranganathan インド図書館の父、コロン分類学者) を招聘し「比較分類について」講演会を開催。日本図書館協会も大阪で講演会を行っております。

養成所の歴史は過ぎ去った遠い思い出ではなく、後に図書館短期大学、図書館情報大学を経て筑波大学情報学群へ引き継がれ、21 世紀の情報化社会のニーズ(創造)に応え、これを担う有能な人材育成のための教育へ益々の向上発展が期待されております。

むすび

体育の授業は広場がないので上野高校のグラウンドで行われたが、その外に運動は公園内の正岡子規記念野球場でキャッチボールやバレーボールを楽しむ。休み時間には廊下の卓球台で加来事務長も加わり賑やかな卓球は楽しい思い出。隣の東京藝術大学音楽部邦楽科教室から琴、三味線や尺八の音が授業中に聞こえ、寛永寺の鐘の音もよく響いて来ました。上野図書館地下食堂のカレーライス 25 円(大卒初任給 1 万円未満、高卒 7 千円前後の時代)は美味で記憶に残ります。

終わりに八期生の女子男子学生比率はほぼ拮抗し現役入学者他、年長者大正生まれ 1 名、昭和一桁 10 数名、中途退学者数名は大学へ進学。卒業生 59 名の主な就職先は国立国会図書館、都道府県立図書館、区・市立図書館、大学図書館、一般企業・金融機関の調査部や研究所図書室などでした。

卒業後の昭和 58 年、同期女性司書も参加して各方面の図書館で活躍中の女性司書総勢 250 名による「婦人司書の会」が結成され、交流を深めて参りました。会長小河内芳子女史。

功なりし同級生は幹部上級司書として後進の指導育成、各地で開催される図書館員の教育講習会に於いて講師を務めるなど、主導的な役割も果たして参りました。

我々同期の仲間意識は強く、同期会はこれ迄十八回を数え、平成二十九年に「傘寿会」を、三十年に「卒業六十一年同期会」を古巣の上野で開催し出席者 18 名、近況報告などに華を咲かせました。八十二才で未だ元気豊饒として図書館活動に携わっている同級生もおります。

最後に、本稿執筆に際してご協力頂いた方々のご尽力に敬意を表し、心より感謝申し上げます。

養成所 草木深し 学び舎は 今なく仰ぐ 恩師偲ばる

◇知識情報・図書館学類の状況：令和元年度◇

筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類長 歳森 敦

1) 在籍者数

R1. 5. 1 現在

区分	人数 (内女性)	男性比
1年	105 (45)	57.1%
2年	105 (55)	47.6%
3年	118 (55)	53.4%
4年	132 (79)	40.2%
合計	460 (226)	49.1%

※定員 100名 + 3年次編入 10名

2) 主専攻別人数 (3年次に主専攻に配属)

主専攻	教員	3年	4年
知識科学	15	31	34
知識情報システム	13	39	46
情報資源経営	14	48	51

3) 進路状況

R1. 5. 1 現在

進路	H29	H30
企業	62 (57.9)	77 (63.6)
図書館・公務員・教員	15 (14.0)	17 (14.0)
大学院進学	18 (16.8)	16 (13.2)
研究生	2 (1.9)	0 (0.0)
就活中	5 (4.7)	4 (3.3)
公務員試験等受験予定	1 (0.9)	2 (1.7)
進学準備	1 (0.9)	0 (0.0)
その他	3 (2.8)	5 (4.1)
合計	115 (100)	121 (100)

※カッコ内は比率

4) 国際インターンシップ

留学先	H30	R1
上海図書館	0	0
釜山大学	0	0
ピッツバーグ大学	1	—
シュトゥットガルト大学	2	3
国立台湾師範大学	0	2
合計	3	5

5) 入試志願者数

区分	定員	H29	H30	H31
AC	5	12 (2.4)	14 (2.8)	31 (6.2)
推薦	40	23 (1.2)	32 (1.1)	89 (2.2)
前期	40	209 (3.5)	165 (3.3)	146 (3.7)
後期	15	124 (8.3)	104 (6.9)	115 (7.7)
全体	100	323 (3.7)	315 (3.2)	387 (3.9)
編入	10	43 (4.3)	37 (3.7)	51 (5.1)

※カッコ内は倍率 (志願者数/定員)

6) 教員の異動

退職 2019. 3. 31 緑川信之教授、石井夏生利准教授
 担当学類変更 2019. 4. 1 森継修一教授
 新任 2019. 4. 1 加藤誠准教授

推薦入試の定員を2年間で20名から40名に倍増させ、平成31年度入試からビブリオバトルを用いた集団面接形式に変更しました。少し話題になったので、耳にされた方もいらっしゃるのではないかと思います。実施初年度はおかげさまで89名の志願者を集めることができました。今年も多数の志願者が集まることを祈っています。

教員異動では、緑川信之先生が定年退職されたほか、石井夏生利先生が中央大学に転出されました。また、情報メディア創成学類では杉本重雄先生と西岡貞一先生が定年退職されました。これに伴い、森継修一先生が情報メディア創成学類の担当となりました。

2019 年度（通算第 22 回）総会の記録

〈日時〉2019 年 7 月 21 日（日）
 〈会場〉筑波大学東京キャンパス文京校舎 118 講義室
 〈出席者〉役員・顧問を含め、17 名

成 31 年 3 月 25 日）に寺沢会長が出席

〈総会議事〉

- (1) 開会の辞（寺沢白雄会長）
- (2) 会則第 19 条第 2 項により寺沢会長を議長に選出。
- (3) 筑波大学の状況報告
 - ・顧問の中山伸一筑波大学教授より、筑波大学の状況報告があった。
 - ・学位プログラム制実施にともない、図書館情報学分野は、〔学部〕情報学群 知識情報・図書館学類、情報メディア創成学類（変更なし）、〔研究科〕人間総合科学学術院（研究科に相当）のものと人間総合科学研究群（従来の専攻に相当）のひとつの学位プログラムとして「情報学」（Informatics）へ移行、となる予定。

- (3) 会報第 24 号（2018 年 12 月）、第 25 号（2019 年 3 月）の発行
- (4) 全卒業生交流会「大橋会」（第 9 回）を開催
- (5) 同窓会管理システム導入の検討のため、2019 年 2 月にワーキンググループを発足し検討開始

3. 決算報告…（別項の通り）

2) 同窓会管理システムの導入について

- ・ワーキンググループより、同窓会管理システム alumnet 導入の検討内容を報告。
- ・クラウド型システムへ移行し、セキュリティ強化とともに新機能を活用、同窓会活動の活性化につなげたい。
- ・導入を決定。システム実証・活用検討を進める。

4) 2019 年度事業計画案及び予算案

1. 事業計画

- (1) 独立した同窓会組織としての運営体制の確立・整備、
- (2) 会員の一層の拡充、(3) 会報の発行、(4) 公開イベントの開催、(5) 全卒業生交流会「大橋会」（第 10 回）の開催、(6) 筑波大学校友会及び同窓生各グループ活動との連携、(7) 同窓会管理システムの導入、(8) その他

2. 予算案…（別項の通り）

3. その他

筑波大学支援図書館情報学振興基金活動（終了）に代わる、母校の大学への支援活動のあり方を、会長・副会長と大学教員との間で協議する。

（橋会理事 城谷浩 [図情大 昭和 59]）

(5) 議事

1) 第 8 期役員の変動について

- ・第 8 期役員等（任期：2018 年 7 月～2020 年 7 月）の変動が提案・承認され、新役員が紹介された。

2) 2018 年度事業報告・決算報告

1. 会員現勢報告（別項の通り）

2. 事業報告

- (1) 2018 年 7 月 8 日に 2018 年度（通算第 21 回）総会を開催
- (2) 筑波大学行事への参加：平成 30 年度卒業式（平

【会員現勢】

会員数：1,436 2019 年 9 月 29 日現在

卒業校別内訳

卒業校	人数	卒業校	人数
文図講習所	39	図大図情	517
文図養成所	46	図大図情修	17
文図養成 A	122	図大博前期	10
文図養成 B	34	図大博後期	1
文図養成 1B	3	筑図	135
文図養成 2B	5	筑博図情修士	3
図短付養成	14	筑博図後期	3
図短図書館	245	筑博図情前期	5
図短文献情	62	筑図情専門学群	2
図短特養課	90	筑知情図学類	70
図大図情専	10	筑図情メ研科	3

合計 1,436

新入会員（2018 年 9 月以降）

- 4190030 千錫烈（筑博図情前期）
- 4180013 野口康人（筑図）

逝去（2018 年 9 月以降）

- 3550127 グランツァー美和子（図短特養課）
（平成 30 年 ご逝去）
- 3290043 平野勝重（文図養成所）
（平成 30 年 8 月 1 日 ご逝去）
- 3280009 伊藤正幸（文図養成所）
（令和元年 ご逝去）

退会者 11 名（2018 年 9 月以降）

◇2018 年度決算報告◇

収入の部		支出の部	
繰越	7,768,398 円	支出	667,460 円
収入	962,539 円	次年度繰越	8,063,477 円
合 計	8,730,937 円	合 計	8,730,937 円

内訳

収入の部		支出の部	
項 目	決算額	項 目	決算額
繰越	7,768,398 円	広報費	23,360 円
会費	438,000 円	印刷製本費	283,736 円
維持協力費	372,000 円	通信費	309,800 円
寄附金	152,500 円	貸借費	25,080 円
雑収入	39 円	大学支援費	0 円
小 計	962,539 円	諸謝金	0 円
収入 合計	8,730,937 円	慶弔費	0 円
		消耗品費	2,816 円
		諸経費	22,668 円
		支出 合計	667,460 円
		予備費	0 円
		次年度繰越	8,063,477 円
		計	8,730,937 円

◇2019 年度 予算◇

収入の部		支出の部	
項 目	予算額	項 目	予算額
前年度繰越	8,063,477 円	広報費	30,000 円
会費	420,000 円	印刷製本費	600,000 円
維持協力費	340,000 円	通信費	350,000 円
寄附金	120,000 円	貸借費	30,000 円
雑収入	1,000 円	システム利用料	400,000 円
小 計	881,000 円	大学支援費	100,000 円
収入 合計	8,944,477 円	諸謝金	100,000 円
		慶弔費	50,000 円
		消耗品費	10,000 円
		諸経費	30,000 円
		支出 合計	1,700,000 円
		予備費	7,244,477 円
		計	8,944,477 円

図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日 1-2 E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ <https://tachibana-kai.com/web/>

F a c e b o o k <https://www.facebook.com/lib.info.tachibanakai/>

発行: 2019 年 11 月 20 日